

家庭と社会の関連をふまえた「家族」の授業：
出生率低下をテーマとして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊村, 洋子, 分校, 淑子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20191

家庭と社会の関連をふまえた「家族」の授業

——出生率低下をテーマとして——

豊村 洋子・分校 淑子*

An Activity of General Home Economics at Senior High School A Study of 'Family' with regard to the Relationship between Home and Society —On the Fall in Birthrate—

Yoko TOYOMURA · Toshiko BUNKHO*

Summary

Today the function and concept of 'family' is changing rapidly. Family affairs are likely to be regarded as just private, especially among young people. Nevertheless, we cannot overlook the fact that family affairs are closely related to public society. At senior high school it is important to teach students to recognize this relationship, through which they will see their own family in a new light. This paper reports the plan, practice and result of a teaching case at senior high school designed with the purpose above mentioned. Students are given the theme "what has caused the fall in birthrate?", one of the most serious problem closely related to both society and family. Through the activities such as discussion and computer analyses, they are supposed to notice the relationship and give it serious consideration.

はじめに

近年の、女性の社会進出・出生率の低下・高齢化社会の到来等の現象と共に、「家族」は大きな揺らぎの時代を迎えている。それに伴い、マスコミは家族の危機や家庭の崩壊を唱え、また、歴史社会学や女性学等の各分野からも家族に対する積極的な研究が多くなされている。

家庭科教育においても、この「家族」への関心の高まりは反映され、小・中・高等学校共に、平成4・5・6年より実施される新学習指導要領において、家族領域の占める割合は増大している。男女共修を念頭においた上で、この家族

領域を具体的にどのように扱っていくかということは、家庭科教師にとってのみならず家庭科教育全体にとっても大きな課題と言えよう。

一般的に家庭内のことは、個別家庭の私事とみなす考えはまだ根強く残っており、高校生の認識もほとんどその域を脱していない。また、授業でも個人的な感情論や理想論で終始してしまう傾向が強い。確かに、現在のような、公私の区別の明確な社会において、家族は公的な領域と区別して、私的な領域と位置づけられている。しかし同時に、公的な社会の影響を大きく

平成3年9月17日受理

* 金沢大学教育学部附属高等学校

学会口頭：本論の一部を以下において発表

(1) 日本家庭科教育学会：平成3年6月29日

(2) 第17回日本教育工学研究協議会、第5回日本コンピュータ教育研究協議会（共催）（平成3年9月15日）

受けるものであることも事実である。授業では、家族を客観的に捉え、家庭と社会の関連を明確に押さえることが必要である。

また、現在の家族のあり方のみを家族として捉えるような、狭い感覚で終始させることのないよう配慮したい。それには多面的な視点を与え、家族も相対的なものであるということ認識させた上で、新しい家族の形に対しても、創造的に考えさせることが大切である。

従って、家族領域の学習においては、以下の3点を主目的とし、内容の構成を行いたい。

- (1) 家族を客観的に捉え、家庭と社会の関連に着目する。
- (2) 家族を相対的に捉え、時代や社会の変化によって変化することを認識する。
- (3) 一人一人が新しい家族を創る主体であるという意識を持つ。

これらは、“教わって知る”ことよりも“自ら考えを導き出す”ことに価値がある。従って、説明調の一方通行的講義式授業形態のみではこれらの目的を達成することは困難である。この視点をふまえた授業の実践形態として、以下に示す方法を取りたい。

第一に、教師が一方的に情報を与えるのではなく、生徒自らが情報を選択・分析・加工することを通して、感覚的につかむ中から認識を深めていく。この為、

(a)情報機器活用の学習形態の導入をはかる。

第二に、教師主体から生徒が主体の授業、つまり生徒自らが問題の解決点を見出だしていく学習として、

(b)適切なグループ学習の活用。

(c)ディスカッション型式の授業形態の活用。

以上3点の授業形態を取り入れたいと考える。

本稿では、高等学校家庭科の家族領域に関して、上に述べた授業目的と、それに基づいた授業方法により行った「家族」の授業の設計及び実践に基づく考察を通して、家族領域の新しい展開についての提示を行った。特に、授業目的

に掲げた(1)を中心とした、現今の社会的関心でもある、出生率の低下の要因について、コンピュータの活用とグループディスカッションを通して探求するという授業の展開を試みた実践を中心に論述した。

I 「家族」全体に関して

1 「家族」の授業の位置づけ

「家族」の授業は、2年次の2学期後半から3学期にかけての約15～16時間を費やし、高等学校家庭科の締め括りとして行った。対象は女子のみであり、1クラス16～18名である。

本授業に先立ち、これに関連した授業として1年次の3学期に、「私のライフスタイル」というテーマで、15～16時間を費やしてある。ここでは、“女性”“性”“働くこと”を中心に、クラスでのディスカッションを通した上で、自分の生き方について個々人が考えるという展開をした。

また、新学習指導要領にも合わせた試みとして、2年次の2学期には、他教科の授業を割愛してもらい、1クラス合計4時間づつとはいえ、男女共学での授業を実現している。ここでは、「家庭科って何?」というテーマで、諸外国の生活スタイルの映像も教材として取り入れながら、男女の生き方や、家族についての的を絞り、グループディスカッションを中心とした授業を行った。

生徒は家庭科において“考える授業”を以前から継続的に体験している。従って、生徒は自分の生活や生き方について見つめる力や、他の価値観を理解しようとする姿勢は、かなり身につけていると言える。また、男子生徒の家族についての考え方も、若干とはいえ知る機会を得ている。ディスカッション形式の授業についてもほとんど抵抗はなかったと言える。

表1 「家族」領域の全体像

①	家族の一般的定義とキーワード 同居・婚姻・血縁・(愛情)
②	家族のゆらぎと社会 ～家族の横軸(結婚)と縦軸(子ども)に見られる変化～ ・結婚の意味の変化と男女の結婚観の違い ・出生率の低下を引き起こす社会のしくみ
③	家族の歴史 ・古代から近代以前までの家族の形態 ・近代家族の特色 ・近代家族＝家族という感覚
④	家族の現在 ・生殖と血縁 ・母性本能と家族愛 ・老人と死
⑤	近未来家族 ・利系家族 etc.
⑥	それぞれの家族

2 「家族」全体の流れ

「家族」領域全体の流れは、表1に示す通りである。

まず、①において家族のキーワードとして用いられている「同居」「婚姻」「血縁」そして「家族愛」について現在の揺らぎを簡略に紹介することにより、テーマ全体の要である「家族とは何か」という問題提起を行った。

②では、家族のキーワードの中で特に、家族の横軸としての結婚と、縦軸としての子どもの誕生、つまり出生について焦点を絞った。ここでは、現代の家族形態の揺らぎや、家庭と社会の関連についての認識を、感覚的に捉えさせるようにした。まず結婚については、現在、結婚そのものの意味が問い直されていることや、それが男女間で食い違ってきている実態を実例を通して紹介、それによって個々人にとっての結婚の意味を考えさせてみた。次に、出生については、近年我が国の社会問題にもなっている出生率の低下の要因をコンピュータの活用により

生徒自らが探りだすという課題学習の形式をとった。

①②で、現代の家族の揺らぎや、家庭と社会の関連を感覚的に捉えさせ、③において家族の歴史を見ることを通し、家族はその社会や時代により、色々な形態や特色をもってきたこと、そして現在、家族として捉えているのは、「近代家族」という一つの家族の類型であることを押さえた。

その上で、④では現在浮上してきている様々な関連問題を示してみた。生殖技術の発達に伴う倫理観の問題や血のつながりの意味、母性本能への懐疑、医療の発達と高齢化に伴う死の意味の変化等々の問題である。

次に⑤では、近未来家族の例として、血のつながりと男女の役割分業へのこだわりを取り払った「ポストモダンファミリー」や、博報堂生活総合研究所発表の「90年家族・利系家族」等を示した。

最後に、これら①から⑤をふまえ、家族は今揺らいではいるが、同時に新しい家族を一人一人が創造して行くことができる時代が到来しつつあるとまとめ、一人一人の問題としてフィードバックし締めくくった。

II コンピュータを活用した

出生率低下を探る授業に関して

1 「出生率低下」を扱うことについて

家族とは、互いに「生と死」を担い合う集団であると筆者は仮定している。従って「家族」の授業においても、「生と死」を深く見つめさせたいと考える。その一手段としても、出生率の低下という現象は是非扱いたい内容でもある。

また、近年の日本の出生率の低下は著しく、1989年の合計特殊出生率は1.57と、1899年に統計を取り始めて以来、過去最低となった。1.57ショックという言葉も生まれ、出生率の低下は社会問題とされ、現在、原因や対策について様々

な意見が出されている。生徒たちにも、1.57という数字を通して、女性が産むこと・産まないことで揺れている現実を、単に社会問題としてではなく一人一人の問題として考えさせたい。

以上の理由から、「家族」の授業の中で出生率の低下について扱うことにしたが、生徒は、「産まなくなるという傾向」に対しそれ程積極的に受けとめようとはしない。確かに、高校生の女子にとって、産む・産まぬの選択は実感として考え難いことであるかもしれない。とはいえ、「自分は（女性は）産む性である」という自覚は大変強いように受け取れた。そのような生徒達にとって、産めない状態や産まない選択は、とても遠い感覚であろうと推測できた。また単純に、まだ子どもである自分の存在そのものを否定されているようで、反感を感じる頃でもある。しかし、ここ2～3年の間に少数派ながら、生徒の中で、「産みたくない」との意志を表明する者も確実に増えてきている。高校生ながら、時代推移の流れを自分に引き寄せて感じとっている者もいるのである。

高校生に対し、「家族」の授業の中で出生率の低下を教材化することは若干困難なことかもしれない。しかし、現実を見つめる中で家族について、もう一步考えを深められることを期待したい。

2 コンピュータの利用について

§1 家庭科におけるコンピュータ教育の意味

近年コンピュータは私たちの生活に浸透してきた。それに伴い、平成6年度より実施される高等学校学習指導要領では、家庭科の授業においてもコンピュータの活用を行うことを掲げている。しかし、筆者は、無条件に家庭科の授業の中にコンピュータを導入することには疑問を抱いている。

高等学校家庭科の現状としては、コンピュータを授業に使用することについて賛否両論の意見が混在していると言える。しかし、それについて議論がなされることもほとんどないままに

市販ソフトは出回り始めている。また、コンピュータを使用した授業は内容の吟味もないまま、「コンピュータを使った」というだけで評価される風潮がある。早急に、家庭科にとってのコンピュータの意味を検討すると同時に、コンピュータを活用した教材内容についての建設的検討も行われることが望まれる。

筆者は、本校の檜田豪利教官とのディスカッションに基づき、家庭科におけるコンピュータの活用に関して以下のような見解を持っている。

まず、教師がコンピュータは単なる道具であることを再認識する必要がある。これはあたりまえのことではあるが、事実コンピュータを活用した授業の多くはコンピュータを過大評価した観があり、コンピュータを使用する為に授業が組み立ててあるかのようである。「初めにコンピュータありき」ではなく、行いたい授業をより効果的にするために、その道具としてコンピュータを用いることが重要なのである。つまり、家庭科の本質に立ち返った上で、コンピュータを使用することの意味が授業の流れの中に明確に位置づけられ、且つコンピュータの使用によって内容にふくらみを持たせられる授業でなければ、コンピュータを活用できたとはいえないのである。

同時に、コンピュータを扱う際には是非注意しなければならないことがある。コンピュータは使用目的が多様な上、命令に対して忠実に実行するという魅力的な道具である。それは、人間の持つ創造力や支配力を大いに満たしてくれる。しかしその為、現在若者を中心に、対コンピュータとのコミュニケーションを対人間とのそれより優先してしまい、正常な人間関係を持つことができなくなってしまうという傾向が表面化してきている。筆者は、家庭科とは人間の暮らしや生き方を見つめる教科であると考え、従って、一步間違えば、コンピュータは人間性を浸してしまうリスクをはらんでいることを、家庭科を通して実験的に見つめさせなけ

ればなるまい。

コンピュータを一方的に避けるだけ、または逆に絶対的信頼をよせ、人格化させてしまうのではなく、自己表現や作業の能率向上等の為に、あくまで人間が使う一つの道具として位置づけられるよう示唆することが、家庭科の担う最も大切なコンピュータ教育の意味であると考えられる。

この考えを根底に、家庭科において、コンピュータを活用した授業を試みた。

§2 本授業におけるコンピュータ活用の意味

前年度も2年生女子を対象に「家族」の授業を実施した。全体の流れとしては今年度のものとはほぼ同様であり、形式もディスカッションを中心として行った。しかし、出生率の低下については、統計等を詳しく示すことなく、その傾向を教師が資料を基に説明した後、クラスでディスカッションをするという形式で行った。その結果、生徒にとって出生率の低下は他人事

や社会現象の一つでしかなかったようであった。また「家族」全体を通して、やはり家庭内のことはプライベートな事として主観的な視点でしか捉えることができなかつたようである。

授業を終えて、生徒たちに家族に対する客観的な視点を持たせられなかつたことが第一の反省点となった。家族に対する客観的な視点なしに、家庭と社会の関連を見出すことはできないだろう。従って、生徒の家族の対する視野も広がらなかつたようである。

生徒たちに、家族に対する客観的な視点と、家庭と社会の関連を実感として捉えさせる為には、どのような授業を行うことが望ましいのだろうか。それについて試行錯誤を行った結果、教える・教わるという形式ではなく、生徒自らが問題に対して事象を分析・解決していくことが効果的であるという仮定を持つに至った。

“出生率低下の社会的要因を探る”という課

表2 入 力 項 目

・合計特殊出生率	・女子就業者の大卒構成比	・平均世帯人数
・出生率	・女子就業者の短大卒構成比	・月間労働時間（総数）
・死亡率	・進学率（男子大学）	・ " （男性）
・人口増加率	・ " （女子短大）	・ " （女性）
・乳児死亡率	・ " （女子大学）	・児童手当支給総額
・新生児死亡率	・家計収入の妻の収入割合	・有配偶女子労働力人口率
・平均寿命（男性）	・産休日数（産前）	・女子離職理由の結婚出産
・ " （女性）	・ " （産後）	育児がしめる割合
・第1子出生母の年齢	・育児時間請求者の割合	・家計黒字率
・1戸建価格（東京）	・出産休暇有事業所の割合	・消費者物価指数（総合）
・ " （地方）	・妊産婦健康管理処置有事務	・ " （食料）
・女子労働力人口率（総数）	所の割合	・ " （住居）
・ " （20～24歳）	・妊娠出産での退職者の割合	・ " （光熱水道）
・ " （25～29歳）	・育児休業制度有事業所割合	・ " （被服）
・ " （30～34歳）	・核家族世帯の割合	・ " （諸雑貨）
・ " （35～39歳）		

題のもと、生徒自身がこのテーマを統計等によって他の社会現象と比較検討するという学習形態をとることとした。しかもその際、数字のみではなくグラフ等も描かせ、視覚を通して感覚的に捉えさせることとした。しかし、これらの作業を手作業で行うことは授業の時間的な面から、生徒の集中力の持続という面からも難しい。

そこで、本授業においては、表計算ソフトのグラフ作成機能を利用することにより、コンピュータを活用した授業を試みることにしたのである。

3 授業について

§1 授業前の準備

①ソフトの選定と購入

表計算ソフト「アシストカルク」(アシスト社)を選定・購入した。主な選定理由は以下に示す3点である。

- (1) 操作方法が比較的簡単である。
- (2) 似かよった機能を持つソフトの中で最も一般的である。
- (3) 価格が安価である。

②データの選定と入力

§3で示すように、本授業で課題とする出生率の低下とは、近年の、昭和55年以降現在進行形の低下をさす。従って、表2に示す44項目について昭和50年以降の年ごとの数値をコンピュータに入力した。

これらの数値は、厚生省の「人口動態統計」・総務庁統計局の「国勢調査」・文部省の「文部統計要覧」等から取り出したものである。選定理由に明確な基準はなく、人口・女性・経済等を念頭に教師が選定したものである。その為、これらの項目に関しては、今後取捨選択の必要がある。

③操作方法の事前指導

授業中のコンピュータ操作の円滑化を計る為、授業前の放課後約1時間を使い、コンピュータの操作方法について事前指導を行った。対象

は、授業で組むグループ（3～5名）の代表者1名ずつである。

§2 授業の流れ

①出生率の変遷を見る

まず、大正10年から今日に至るまでの合計特殊出生率の変遷を表したグラフを提示した。

出生率は減少期と安定期を繰り返す為、この期間を大きく5つに分けることができる。3回

表 3
家族領域における出生率の変化をテーマとした授業

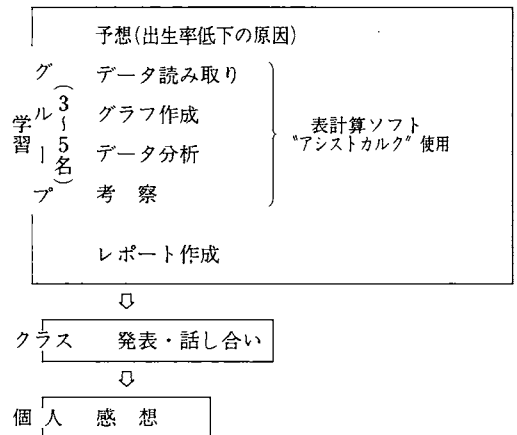


表 4 画面表示の一部

年 度 (昭和)	第一子 出生母 の年齢	1戸建住居価格		離婚数 (万人)	家計黒 字率(%)
		(東京 100万)	(地方 100万)		
50	25.7			11.9	23.5
51	25.9			12.5	22.6
52	26.1			12.9	22.8
53	26.2			13.2	23.0
54	26.3	25.5	16.5	13.5	22.4
55	26.4	30.0	18.9	14.1	22.1
56	26.5	34.2	20.8	15.4	20.8
57	26.5	39.0	23.1	16.4	20.7
58	26.5	39.9	23.5	17.9	20.9
59	26.6	40.7	23.9	17.9	21.3
60	26.7	43.2	24.1	16.7	22.5
61	26.8	57.0	24.4	16.1	22.6
62	26.8	85.3	25.0	15.8	23.6
63		83.6	26.0	15.3	24.3

の減少期にはそれぞれの理由が存在する。生徒には、同時期の平均初婚年齢の推移のグラフと、中絶率及び避妊実行割合の推移のグラフを示すことにより、戦前の減少期には晩婚化、昭和20年代後半の急激な減少には、中絶の合法化と避妊の普及等が、それぞれ直接的な要因としてあげられることを教えた。

しかし、これらの直接的要因となった諸問題がなぜ増大したのかを考えることが本当は大切なことである、と課題を問いかけたまま近年の出生率の低下の要因について探らせることにした。

この過程において生徒は、数字をグラフ化し、重ね合わせることによって、考察を深められることを実感できたようである。また、出生率の低下は以前にもあったことや、その要因が時代によって異なること等も知った。近年の出生率低下の要因を探ることに対しての知的好奇心も

掻き立てられたようである。

②近年の出生率低下の要因を探る

授業は表3に示すような流れで進んだ。

まず、グループごとのディスカッションにより出生率低下の要因について予想を立てさせた。

次に、予想に基づきデータの読み取りを行った上で、関連があると思われるものに関して年次推移や、出生率との相関グラフ等の作成を行った。(画面表示の一部を表4に示す。)さらにグループでのディスカッションを重ね、データ分析をさせた。

データ分析により導かれた考察等について、グループでまとめ、レポートを作成させた。それを基にクラス全体で発表し合い、ディスカッションを行った。最後に一人一人に感想文を書かせてまとめとした。

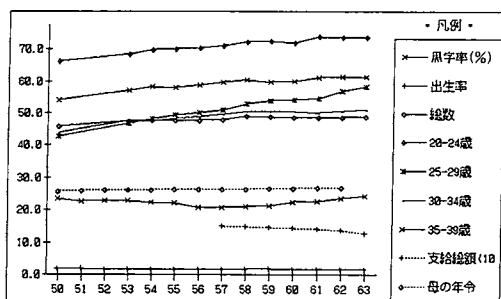
以上を合計4時間の授業で行った。

☆第V期(昭和50年～)の出生率の低下について考察しよう!

1 何に原因があると思うか予想しよう。

- 働く女性が増えたから
- 予想に基づいて選んだ項目は?
 - 年齢別女性労働者率
 - その他いろいろ

2 作成したデータをはりつけよう。



氏名 (ID、IO、KN、TY)

3 データからわかることは?

(出生率低下の原因についての考察)

- 物価の上昇
- 家族の構成員数の減少
- 地価の高騰
- 1人あたりの住居面積の拡大
- 年齢別女性労働者率の全体的な上昇、特に20～29歳層の著しい増加
- 第1子の出産年齢の上昇

これらから、育児には、経済的負担が重い。また、出産に適した年齢に、仕事をする事により、第1子の出産年齢がおくれ、出産児数がへる。

その上、核家族化により、本来、子供の面倒をみるべき人がいなくなった事もあり、ますます助長された。

4 感想

〈考察について〉 子供数の減少には、このような深刻な問題がかくされていたのは意外だった。子供会結成員の減少もこのような社会を背景していたとは……。少し賢くなったような気がした。

〈コンピューター使用について〉

とてもおもしろかったので、今後もできるだけ導入してほしいと思う。私はもしかしておたくの仲間入りをしてしまうかも……。

5 他に入力してあったらよかったと思う項目は?

教育費の推移

図1 生徒の作成したレポートの一例

4 生徒の作成したレポート 及び感想について

生徒の作成したレポートの例を図1に示す。

§1 生徒の立てた主な予想

- (a) 夫婦の不仲と離婚数の増加
- (b) 女性の高学歴化
- (c) 女性の就労意欲の高まり

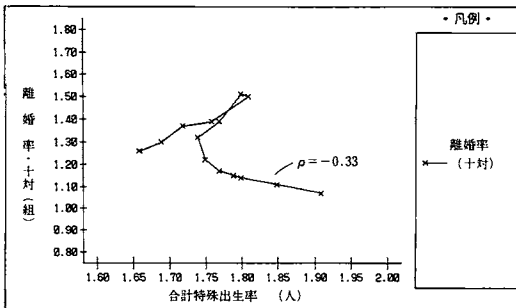


図2 離婚率と合計特殊出生率との相関

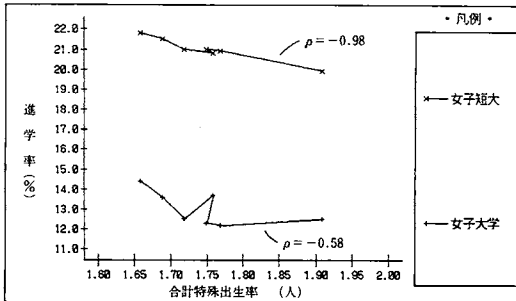


図3 女子の進学率と合計特殊出生率との相関

§2 生徒の作成したグラフ例及び考察

図2は離婚率と合計特殊出生率との相関のグラフである。グラフからあまり相関は読み取れず、離婚が直接の原因とはいえないのではないかという考察であった。

図3は女子の進学率と合計特殊出生率との相関のグラフである。短大では相関が強いものの、4年生大学については、それほど強い相関は示しておらず、概して、女子の高学歴化が出生率を低下させたとは言い切れないという考察であった。

図4は女子労働力人口率及び第一子出生時の母親の平均年齢の年次推移のグラフである。特に、第一子出生時の母親の平均年齢を含む25歳～29歳の女子労働力人口率が急激に上昇している。このことから、仕事と育児の関係が重要なポイントとなっていることが考察されていた。

経済面との関連について、予想の段階ではほとんどなされなかったが、データを読み取るう

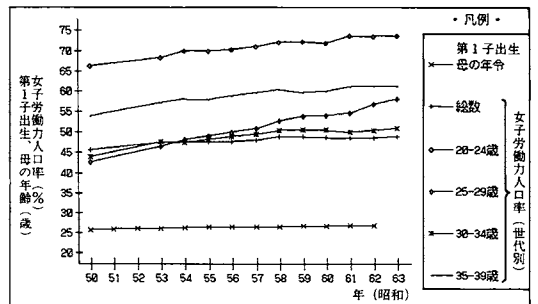


図4 女子労働力人口率と第一子出生、母の年齢の推移

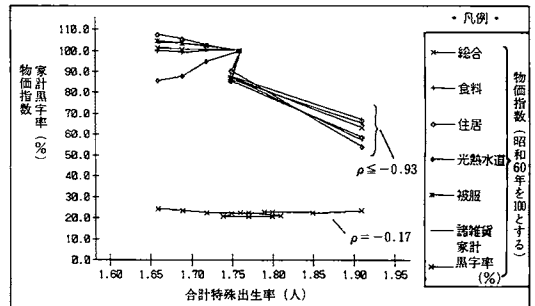


図5 物価指数（昭和60年を100とする）及び家計黒字率と合計特殊出生率との相関

ちに、この関連に気が付いたグループが図5のようなグラフを作成した。物価及び家計黒字率と合計特殊出生率との相関のグラフである。グラフより、物価が上がると出生率が低下する、という傾向が読みとれるが、家計黒字率と出生率との間には相関が見られない。

これらのグラフとグループでの考察及びクラスでのディスカッションを経て、生徒達が導きだした出生率低下の要因は、以下に示す2点に集約された。

ア 地価を筆頭とする物価の上昇に伴い、出生

率が低下している。但し、家計黒字率との間に相関がないことから、生活観の変化、つまり高級志向が影響していると推測される。

イ 第1子出生時の母親の平均年齢に大きな変化がないにもかかわらず、その年齢を含む25歳～29歳の女性の労働力人口率が急激に上昇している。徒って、働きながら子どもを持つという女性の選択が、少産化を促したと推測される。

§3 生徒の感想の一部

- (a) 受け身的に資料を与えられるのと、自分で選択し考察できるというのでは大きく違うなと思いました。自分で考え、自分で確かめ、手探りの状態から真実をつかむことのできるこの授業に大賛成です。
- (b) グラフ化により、感覚的につかめたのはよかったと思う。だけど、それ以前の段階で予想することや、その後の考察で、データには直接表れてこない、人の心にしかわからない何かをみんなで考えることはもっと大切だと思った。
- (c) コンピュータは「冷酷」だと思っていたが、グループで話し合いながらするのは、すごくコミュニケーションがあって温かかった。
- (d) 出生率が低下しないで、女性も自由に生きられるようになれないものでしょうか。それには、女性も男性も共に家事や育児や仕事をするのだと私は思います。
- (e) やっていて、何か足りないと思った。別に、データが足りないというわけではなく、何となく厚みがないと思った。女性が子どもを生まなくなった原因は、そんなに簡単に割り切れるものじゃないと思う。
- (f) 文明の生み出したものは確かに素晴らしいが、私はコンピュータに使われてしまいそうだった。

5 授業についての考察

§1 家庭科の視点から

①生徒の導きだした考察から

§2で示した2点の考察は、予想を遙かに上回る奥深いものであったと思われる。

これは、本授業の前段階として、生き方に焦点を当てた授業を経てきたことや“考える授業”を重視してきたことによる影響が大きいのと思われる。また、グループ学習の形態によって、活発なディスカッションを主体とし、コンピュータを有効に利用できたことにもよるであろう。

②生徒の感想から

§3に示した感想からは、以下のことが考察できる。

(a)・(b)・(c)の感想より、情報の活用とディスカッションをグループ学習の形式で行うことによって、主体的な学習ができたと思われる。

(d)の感想からは、単元の最終目標である新しい家族にむけて模索しようとする姿勢まで感じとることができる。

しかし、(e)の感想からは、コンピュータ活用による社会的要因の追求だけでは、出生や家族に関わることは語り尽くせないという指摘が受け取られる。このような意見も大切に、この後の授業で補足を行っていく必要がある。但し、このような感想が出ること自体、家庭と社会についてとてもよく考えた結果であると考えられる。

また、(f)のような感想を持つ生徒についての対応も、今後の課題としていかなければならない。

生徒から出された感想全体を通して、本授業により、生徒は家族を客観的に捉え、家庭と社会の関連に着目する視点を身につけることができたことを確信する。

§2 情報活用の視点から

データの読み取り・グラフ作成・データ分析及び考察をすることを通して、生徒の情報分析能力の育成が可能となった。

また、クラス全体での発表及びディスカッションを通して、生徒の情報発信能力の育成も可能となった。

本授業は、家庭科の思考の深まりと同時に、

情報活用能力の育成においても有効であったと思われる。

おわりに

筆者は、家族領域の学習を通して、生徒が、家族を客観的に捉え社会との関連に目を向けることにより、家族の相対性を認識し、それらを通して新しい家族を創っていける主体としての意識を持つことを目標とした。

本稿では、この目標にそって進めた「家族」の授業の実践を紹介すると共に、特に出生率の低下をテーマとし、家庭と社会との関連に目を向けさせた部分を中心に、その方法として、コンピュータの活用をグループディスカッションと平行して行ったことについて論じてきた。結果としては、生徒のレポートや感想文及びディスカッションの様子から、本実践が前述の目標を達成する上で、大変有効であったことを確信した。

尚、今後の課題として、本授業の内容における一層の吟味と、コンピュータの活用の際してのきめ細かい配慮が残されている。

最後になりますが、コンピュータの使用に関

して、本校教官の榎田豪利先生に多大な御協力を頂きました。心よりお礼を申し上げたいと思います。

参考文献

- * 厚生省大臣官房統計情報部編「平成元年厚生統計要覧」厚生統計協会1990
- * 人口問題審議会等編「日本の人口・日本の家族」東洋経済新報社1988
- * 分校淑子家族「新しい家庭科 We」ウイ書房1990. 6月号
- * 分校淑子「産まない」ことからみえてくること「新しい家庭科 We」ウイ書房1991. 8・9月号
- * 分校淑子家庭科で行うべきコンピュータ教育とは「新しい家庭科 We」ウイ書房1990夏増刊号
- * 落合恵美子「近代家族とフェミニズム」勁草書房1989
- * 小此木啓吾「家庭のない家族の時代」ABC出版1983
- * 上野千鶴子「家父長制と資本制」岩波書店1990
- * 金井淑子「家族」新曜社1988
- * 小此木啓吾「一・五の時代」ちくまライブラリー1987
- * ますのきよし「家族」現代書館1985
- * 上野千鶴子+ NHK 取材班「90年代のアダムとイヴ」日本放送出版協会1991
- * 「女の人権と性」実行委員会「女はなぜ子どもを産まないのか」労働旬報社
- * グループ・女の人権と性「アブナイ生殖革命」有斐閣選書1989
- * 村瀬春樹「怪傑！ハウスハズバンド」晶文社1984